

〈浅地稲妻に花の丸模様衣裳〉模様の魔力

永津 禎三

「琉球美、造形研究会」で第4回目となる「紅型衣裳見学会」を開催したのは、〈浅地稲妻に花の丸模様衣裳〉の模様の不思議を少しでも解明したかったからだ。

2026年2月と3月に和裁士松本ヨシ先生を囲んでの「ゆんたく会」を「琉球美、造形研究会」定例研究会で開いた。仕立てる時の職人の感覚で、絶妙な柄の配置が決まっているのではないかと考え、その一例として選んだのがこの〈浅地稲妻に花の丸模様衣裳〉だった。『沖縄復帰40周年記念 紅型 琉球王朝のいろとかたち』展図録に掲載されたこの衣裳の図版をお見せしながら、「この柄のずらし方は凄いですよね」という私の質問に、松本先生は平然と「いや、凄くない」とお答えになった。

2024年から続けて3回の「紅型衣裳見学会」を開催し、子ども着への仕立て直しについては一応の考察が出来たと考え、暫くは「見学会」を開催しなくても良いのではないかと考えていたのだが、この衣裳の模様の不思議さを考えるために、やはり開催しなければならないと思い直した。

2026年7月23日に実現した第4回目の「紅型衣裳見学会」で閲覧資料としたのは、この〈浅地稲妻に花の丸模様衣裳〉と〈薄水色地花の丸に桜楓散し模様胴衣〉、〈薄水色地籬に菊萩桜模様胴衣〉である。

もちろん主に閲覧したかったのは〈浅地稲妻に花の丸模様衣裳〉であるが、「花の丸模様」の比較対象として〈薄水色地花の丸に桜楓散し模様胴衣〉を、そしてその胴衣の仕立ての比較対象として、また、柄の微妙なずらし方という意味では〈浅地稲妻に花の丸模様衣裳〉も含めた比較対象として、〈薄水色地籬に菊萩桜模様胴衣〉を選んだ。

まず、この三点の図版と解説文を『沖縄復帰40周年記念 紅型 琉球王朝のいろとかたち』展図録から抜粋した「資料1」を、見学会のために準備した。



103
浅地稲妻に花の丸模様衣裳
絹・大規模
18～19世紀
127.0 x 56.0 cm
沖縄県立博物館・美術館
Bingata costume with design of lightning with flower circle patterns on light indigo ground, silk
18-19th century
127.0 x 56.0 cm
Okinawa Prefectural Museum and Art Museum
地祝様に稲妻を配し、菊、牡丹、菖蒲、水仙と椿、梅、薔薇の花の丸を染めた作品。稲妻は、まず藍染めし、薔を染めて再度、黄色で染染められている。稲妻模様は「ガングロ」と呼ばれ、成人前の童子が着用したと言われる。この衣裳も、袖が長く振りのある子ども衣裳を仕立て直した様子が見受けられる。裏布の赤い袴が衣裳を引き締めている。(Y)



74
薄水色地花の丸に桜楓散し模様胴衣
絹・細縮、片面染、大規模・大柄、白地型
19世紀
88.0 x 61.0 cm
沖縄県立博物館・美術館
Bingata daikin (undergarment) with design of flower circles with scattered cherry, maple, patterns on light aqua blue ground, silk (crape)
19th century
88.0 x 61.0 cm
Okinawa Prefectural Museum and Art Museum
牡丹、梅、菖、菖蒲の花の丸文が規則的に並べられ、そのすき間に楓と桜が散らわられた、花尽くしの代表的な作品である。淡い水色地に加えて丸文の中も淡桃色、淡黄色、淡青色が配され、溶け合うような柔らかい色使いの地色で彩られている。薄い細縮地は染色の作業が難しいが、一つ一つの花が丁寧に彩色されている。特別な一枚であったことがうかがわれる。女性の礼装時の上着の下に身につける制衣の形に仕立てられている。戦後、鎌倉芳太郎と調査を行った伊東忠太(1897～1954年)のコレクション。(Y)



75
薄水色地籬に菊萩桜模様胴衣
絹(三本紐)、片面染、大規模・大柄、白地型
19世紀
86.5 x 74.5 cm
沖縄県立博物館・美術館
Bingata daikin (undergarment) with design of fence with chrysanthemum, bush clover, cherry patterns on light aqua blue ground, silk (gauze)
19th century
86.5 x 74.5 cm
Okinawa Prefectural Museum and Art Museum
白地型で模様の染め、綱を落とし、再度、薄水色の地色を染めた作品。このような地染めのは、地返し(ジークン)と呼ばれる。組織の素材は、中国から舶載されたものである。斜めに置かれた籬に菊や萩など秋の草花が表現された、大胆な美しい作品である。地色を薄い水色とすることを決めて染めたのか、白く染め抜く菊、萩、桜のシロジバネの墨の輪郭線が効いている。(Y)



(『沖縄復帰40周年記念 紅型衣裳 琉球王朝のいろとかたち』図録(2012)より)

次に準備したのが「資料2」である。〈浅地稲妻に花の丸模様衣裳〉の左右の見頃の微妙で絶妙なズレの効果を説明するために作図してみた。



Aが『沖縄復帰40周年記念 紅型 琉球王朝のいろとかたち』展図録に掲載されていた〈浅地稲妻に花の丸模様衣裳〉の画像である。
Bは柄が水平に揃うように、CはAよりも上下にズレるように作図した。三つの図を比べることで、Aのズラしの微妙さ、絶妙さがよく分かるだろう。



型紙一つ分の模様を想定
(左見頃)



(右見頃)

また、この図版を観察するうちに、左右の見頃の模様が同じでないことに気付いた。「花の丸」が縦に二列並んでいる模様なのだが、右見頃だけ、その二列が左右逆になっていることに気付いたのである。左見頃と左右の袖は同一の模様であり、何故、右見頃だけこのような模様の着尺を用いているのか、どのように染めたのかを考察しなければならないと思った。

通常は、同一の模様の着尺を、裏返しに用いたり、上下を逆に配することで、柄合わせを行っているので、右見頃に同じ模様の着尺を用いた場合を作図してみた。DはBと同様、左右の柄を水平に揃え、右見頃に裏返し模様の用いた場合である。EはAと同様のズラしの位置で、着尺の向きを右見頃だけ上下逆に配した場合である。

このようにAからEの図を一覧できる資料を作ってみると、その違いがよく分かる。Bは静止している。Cは斜めに流れるだけなのに対して、Aの微妙なずらしは、ふわりと動き始める瞬間のような絶妙な動静を感じさせる。

そして、Dはまさに王朝風の堂々とした左右対称柄に見え、EはAと同様のズレにしているのに、転がるような動きを感じてしまう。静かに今まさに動き始める瞬間のようなAの絶妙さは、舞踊に通じる美しさを感じさせるのである。

〈浅地稲妻に花の丸模様衣裳〉は元の衣裳から着尺幅を3/4ほどに縮めて仕立て直したようである。それは「花の丸」の模様が片方の列だけ半分になっていることから推測できる。そこで、左のように、元の型紙一枚分の模様を左右の見頃の画像を合成して作図してみた。上が左見頃、下が右見頃である。右見頃の方が、左右の「花の丸」の列の間がやや広い。

この右見頃の着尺がどのように染められたのかについては、二つの方法が考えられる。一つは別の型紙を作ったという方法、もう一つは型紙は別に作らず、同じ型紙を用いて右列の花の丸を左に、左列の花の丸を右にと二回に分けて糊置きしたという方法である。型紙を別に作るのは手間も費用もかかるし、分けて糊置きしたのなら二倍の手間である。そうまでしなければならなかったのだとすれば、このズレも含めて柄の配置には相当の配慮がなされたと考えるのが順当であろう。ここまでの資料の準備を行ってから、見学会当日を迎えた。



見学会では、冒頭の説明を終えた後、まずは、衣桁にかけた状態で〈浅地稲妻に花の丸模様衣裳〉を観察した。

第一印象は、かなり傷んで擦り切れていると思った。また、生地が経年劣化し黄変しているためか、全体にくすんだ色合いになっている。

図録の図版では後面しか掲載されていなかったもので、前面を見てまず驚いたのは、左右の袖がそれぞれ4枚の布で繋ぎ合わせられていたことだった。そのうち2枚は細巾の布を縦に繋いでいて、これは元の衣裳の衿の部分を使ったのではないかという意見も出た。

左片山の部分は、生地がかなり擦り切れていて、裏からの補修があり。左後見頃の右列二つ目の「花の丸」模様には欠落部があり、裏から違う柄の当て布で補修されていた。

ここで改めて『沖縄復帰40周年記念 紅型 琉球王朝のいろとかたち』展図録の解説文を掲載する。(英文部分は略)

103 浅地稲妻に花の丸模様衣裳

絹、大模様

18-19世紀

丈127.0×衿56.0cm

沖縄県立博物館・美術館



地模様稲妻を配し、菊、牡丹、菖蒲、水仙と椿、梅、薔薇の花の丸を染めた作品。稲妻は、まず藍染めし、糊を落として再度、黄色で地染めをしている。稲妻模様は「ガンジ型」と呼ばれ、成人前の童子が着用したと言われる。この衣裳も、袖が長く振りのある子ども衣裳を仕立て直した様子が見受けられる。裏布の赤い衿が衣裳を引き締めている。(YI)

やや、読み取りにくい文章ではある。仕立て直される前の衣裳が「袖が長く振りのある子ども着」ならば、衿の部分と思われる細巾の布を縦に繋いでまで袖に使う必要があったのか疑問もある。

しかし、ここでは、この解説に従い、仕立て直される前の衣裳は「袖が長く振りのある子ども着」

つまり、「成人前の童子（とはいえ大人着並の大きさ）の振袖衣裳」であったと仮定しておこう。

右見頃の着尺をどのように染めたのかについては、見学会で衣裳を実見して確認できた。左見頃と同じ型紙を用いて右列の花の丸を左に、左列の花の丸を右にと二回に分けて糊置きした方法である。

右見頃の方が、左右の「花の丸」の列の間がやや広いことは既に指摘したが、ここで糊置きを繋いでいるのが特に衣裳の前見頃で確認できた（写真1）。また、後ろ身頃の背縫いの部分で、右見頃の縫い目近くで、隣の列の花の丸がちらりと覗いていた。



写真1



写真2



写真2部分

一回で済む糊置きを二回に分けて行うほどの手間を掛けて、右見頃だけ花の丸の列が左右逆になる着尺を使ったのは何故か。この疑問は、やはり、仕立て直される以前の振袖衣裳から考察する必要があるだろう。

そこで、見学会で撮影した衣裳の写真を合成して、型紙一つ分の模様を作成し、振袖衣裳を「資料3」として想像してみた。A～Eは「資料2」の記号と符合している。



B



A



C



D



E



F



A



このAが私の考える「成人前の童子の振袖衣裳」である。〈浅地稲妻に花の丸模様衣裳〉と同じように左右の後身頃の柄がズレている。このような衣裳が作りたかったから、わざわざ右見頃の着尺だけ左右の花の丸の列の位置を逆にするような手間を惜しまなかったに違いないと思う。

推論に推論を重ねることになってしまうが、当初、紅型製作者が考えた衣裳はDまたはFであっただろうと思う（FはEのようなズラしがなく水平に揃っているもの）。左見頃に用いた着尺一種類でこの二種類の衣裳を作ることができる。

しかし、仕立ての職人は、より気品のある、所作の始まりを意識させるような動静あるAを構想し、右見頃のために異なった刷りの着尺を所望したに違いない。

とすれば、この「成人前の童子の振袖衣裳」はまさに「琉球舞踊」のための衣裳ではなかったのか。そして、〈浅地稲妻に花の丸模様衣裳〉はこの振袖衣裳を、童子用のやはり「踊り衣裳」に仕立て直したものであったのではないか。こんな夢をかき立てられるのだ。

ここで改めて、この衣裳の名称に係る、根本的な問題を考えてみたい。

この衣裳は〈浅地稲妻に花の丸模様衣裳〉と言われているが、この地の模様は、果たして「稲妻模様（ガンジ型）」なのだろうか。

確かに、「花の丸」と「稲妻」を組み合わせた模様は、鎌倉芳太郎資料にも多くみられる。しかしこのように、水流と絡み合うような例、しかもその水流には紅葉も流れ、水鳥も飛ぶ。このような例は他には見当たらない。

つまり、これは「稲妻」ではなく「輝く水面」なのではないか。とすれば、この衣裳の名称は〈浅地紅葉、水鳥、流水に花の丸模様衣裳〉となる。

まさに、水流に乗って「花の丸」が鞠のように揺れ、転がっているのである。

もしも、「ガンジ型」でなければ「成人前の童子が着用」と考えなくても良くなる。つまり成人男性の「踊り衣裳」の振袖と考えられることになる。

そしてこれが後に払い下げられ、村芝居で用いる童子用の「踊り衣裳」に仕立て直され、長年使われ傷んでも何度も繕い直しながら使い続けられた…。

こんな風にとめどもない夢をし続けてしまう。それが、この衣裳の模様の魔力なのに違いない。

〈浅地稻妻に花の丸模様衣裳〉模様の魔力

著者：永津禎三

私家版

2026年8月6日発行